

るに多いと言うような傾向はこのシラヒゲウニについてはあまりはっきりしない。

#### ハ 移 動

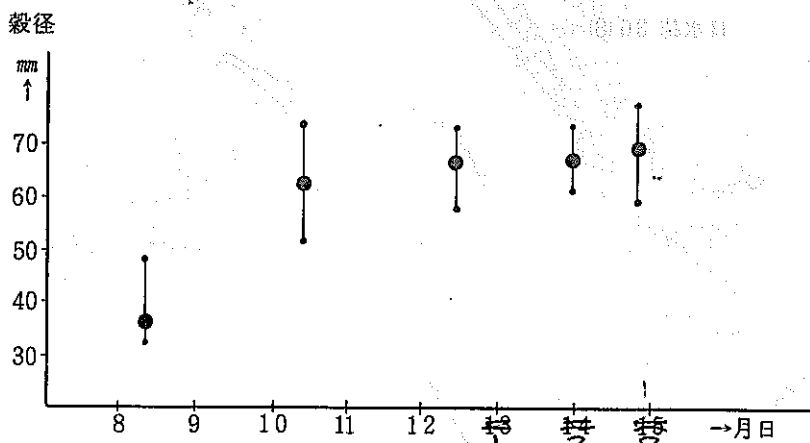
シラヒゲウニの生息域を示した第12図にみられるように、8～10月における生息域と12～2月における生息域の間には、干潟地帯の生息地の上限について、いくらかのズレがみられる。すなわち8～10月の生息域の上限は+30のレベルであるが、12～2月の上限は+50に上昇している。その間の水平距離は長い方では少なくとも100mを下らない。

エゾバフソウニの移動とその理由はすでに知られているが、シラヒゲウニについても索餌のために移動することを漁師は経験的に知っている。シラヒゲウニの移動がみられるこの時期は北風が卓越し始まる頃に相当している。すなわち風浪による打ち揚げとも考えられなくはない。しかし次項で述べるように、ウニの摂餌のため、一面が刈り取られた様になっているスガモ帯の食痕を観察すると、ウニの移動は索餌のための積極的行動の結果と考えられる。

#### ニ 仔ウニの多くみられた場所

47年8月の調査では殻径2cm以下の仔ウニが多くみられた。主な場所はマンジ島の周辺とギシフ島寄りの近くであった。それに漁師から聞き取り調査ではメオト島の近くにある南西の方向から入り込んでいる5m水深の水路の南側に多く生息していると言う。これらの結果から、水路に沿うboat channelの一带において多く着底し成長するものと思われる。因みにこの一带は春から夏にかけての大潮低潮線のレベルにおよそ相当する。

シラヒゲウニの成長についての記録は見当らず、そこで8月から採集したものをプロットしたのが第13図である。10月以降1～2cm大の仔ウニをみつけることができなかった。2cm大から4ヶ月間で5cm大に成長したのか、逸散あるいはへい死したのかは明らかでない。バフソウニについての成長の記録からすれば、成長の結果仔ウニがみられなくなると考えられない。いずれにしても仔ウニの着底し成長する場、および、その後の移動についてさらに詳しく追究する必要がある。



第13図 ウニの殻径変化